

推理百貨店

別館

新保博久



冬樹社

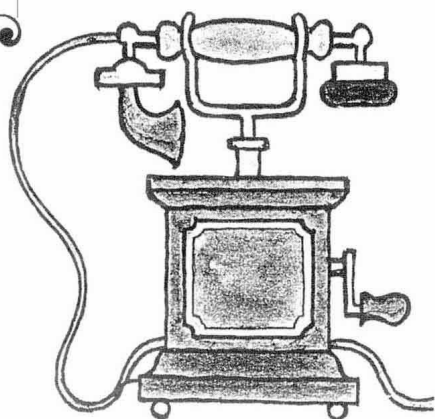
新保博久

推理
百貨店

工業学院図書館
藏书章

別館

冬樹社



推理百貨店 別館

一九八九年八月六日 第一刷発行

著 者 新保博久

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都新宿区荒木町23 一六〇

電 話 〇三―二二五―四七三二

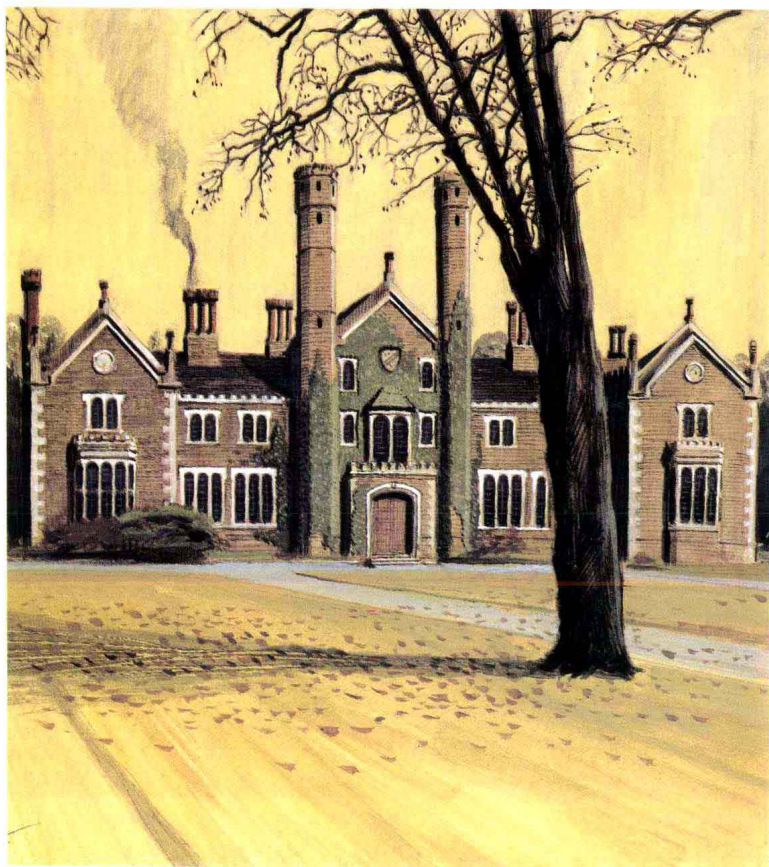
印刷所 株式会社 七光社

製本所 小高製本工業株式会社

定価は表紙カバーに表示してあります。

© 1989 Hirohisa Shimpō ISBN4-8092-3040-6 C0095

バスカヴィル館

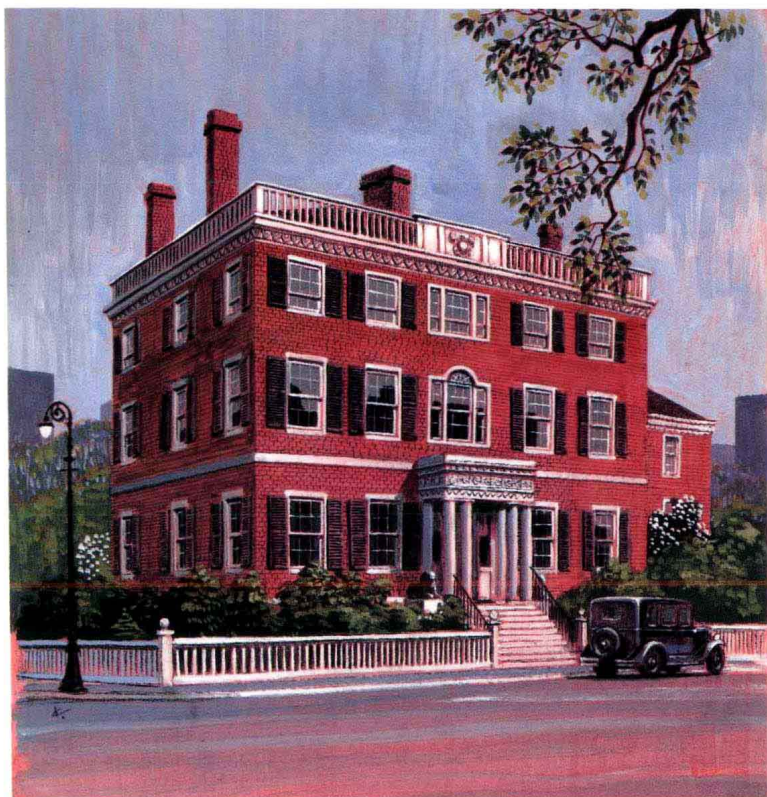


コナン・ドイル 『バスカヴィル家の犬』

(小池滋・富山太佳夫訳)

門をくぐると並木道になっていて、落葉のためにふたたび轍の音はかき消されてしまった。両側の古木が枝をのぼして頭上に暗いトンネルをつくっていた。バスカヴィルは暗くつづく道の終端に亡霊のごとくに、ほのかに見える館を認めて、身ふるいした。

ハッター邸

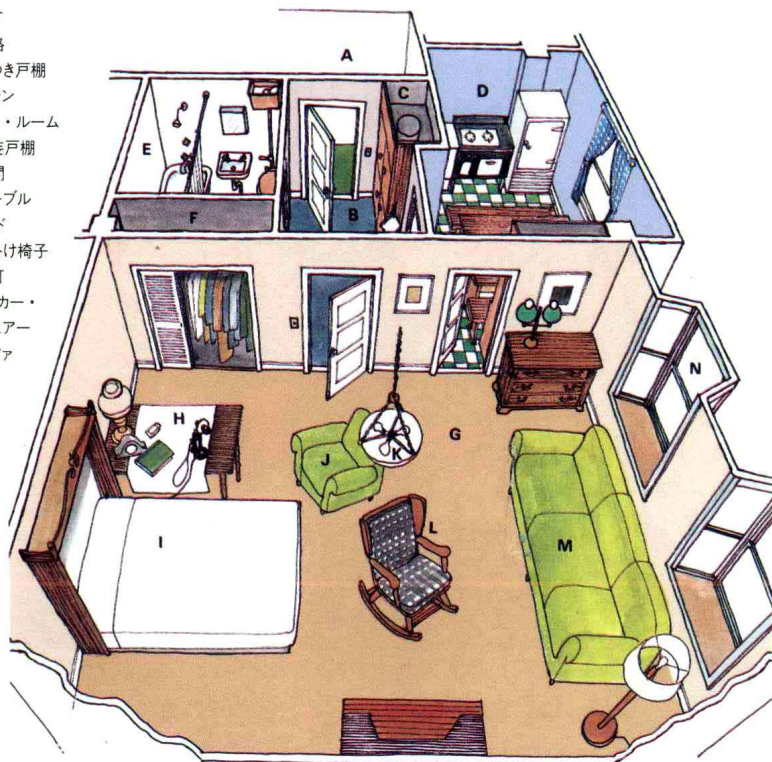


エラリイ・クイーン 『Yの悲劇』 (宇野利泰訳)

三階建ての箱型の邸宅で、あかるい朱色の煉瓦を積みあげてある。いかにも時代めいたつくりで、開拓期の遺物と呼ぶにふさわしい建物だ。かつてこの広場が喧噪な集会に利用されたころの思い出である大きな窓には、厚いカーテンが垂れ、軒の蛇腹は浮彫りで飾っている。玄関はずっと高いところにあって、両側に鉄の手すりをもった白い階段がそこまでつづいていて、のぼりきったところに鑄鉄製の牡獅子が一對、緑色の錆を浮かせてひかえている。

サム・スペードの部屋

- A=廊下
- B=通路
- C=鍵つき戸棚
- D=キッチン
- E=バス・ルーム
- F=衣装戸棚
- G=居間
- H=テーブル
- I=ベッド
- J=肘掛け椅子
- K=電灯
- L=ロッカー・チェアー
- M=ソファ
- N=窓



ダシール・ハメット 『マルタの鷹』 (宇野利泰訳)

スイッチの音が生、天井の中央から金メッキの鎖三つで吊るされている碗形の電灯がともり、部屋じゅうが明るくなった。グリーンと白の格子縞のパジャマを着て素足のスペードが、ベッドの片側に腰を下ろしていた。彼は卓上の電話機を覗みつけるようにして、そのわきにある茶色のタバコ紙とブル・ダラムの袋をとりあげた。

あけ放した二つの窓から、湿った冷気が流れこんで、一分間に六回の割合で吹き鳴らされるアルカトラス島の霧笛のにぶい響きを運んできた。……

ファンリイ荘

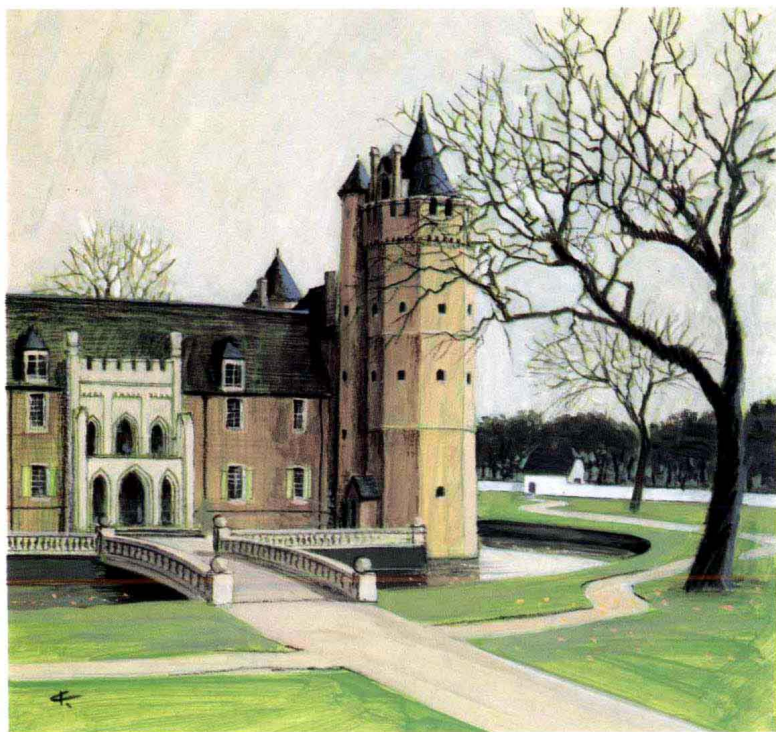


アガサ・クリスティ 『アクロイド殺害事件』 (原百代訳)

私がファンリイ荘の玄関の呼鈴を押したのは、七時半に二、三分前のことだった。執事のパーカーが天晴れな機敏さで扉を開けた。

その夜はよく晴れていたのて、私はぶらぶら歩いてきたのだった。大きな四角い玄関の広間へ入ると、パーカーが外套をぬがしてくれた。

グランディエ城



ガストン・ルルー 『黄色い部屋の秘密』 (日影丈吉訳)

夏の間、スタンガソン嬢が爽快さを好んで、わざわざ住みにきた場所を、淋しい不吉な季節に来て、見たのだが、地面は黒ずみ、降って間もない雨と、土に帰った朽葉で、どろどろしているし、樹の幹も黒っぽく、頭の上の空さえ重く厚ぼったい雲を押し流して、喪に服しているようだ。この陰気な見棄てられた一隅に、我々は離れ小屋の白壁を見つけたのだった……。

奇妙な建物で、我々の見た方角からは、窓ひとつあらわに見えず、ただ小さな扉がひとつ、入口のありかを示しているのみで、荒れはてた森の奥に立つ墓か霊廟とでもいったらよかろう……。

黒死館



小栗虫太郎 『黒死館殺人事件』

……正門までは手入れの行届いた自動車路が作られていて、破^は牆^{しょう}挺崩^{てい}しと云われる切り取り壁が出張った主楼の下には、薊^{あざみ}と葡萄^{ぶどう}の葉文が鉄扉を作っていた。その日は前夜の凍雨^{とうう}の後をうけて、厚い層をなした雲が低く垂れ下がり、それに、気圧の変調からでもあろうか、妙に人肌めいた生暖かさで、時折微かに電光^{いなずま}が瞬き、口小言^{くちこごと}のような雷鳴が鈍く懶氣^{ものうげ}に轟いて来る。そういう暗懨たる空模様の中で、黒死館の巨大な二層楼は——わけても中央にある礼拝堂の尖塔や左右の塔櫓^{とうろ}が、一刷毛刷いた薄墨色の中に塗抹^はされていて、全体が樹脂^{やに}っぽい単色画^{モノクローム}を作っていた。

アッシャー邸



エドガー・アラン・ポー 『アッシャー家の崩壊』（河野一郎訳）

わたしは眼前の光景を——何の変哲もない邸とまわりの景色を——
寒々とした壁を——うつろな眼まなこのような窓を——生い茂ったわずかな
菅草を——朽ち果てた数本の木の白い幹を、めいるような気持ちで
打ち眺めた。

赤い館

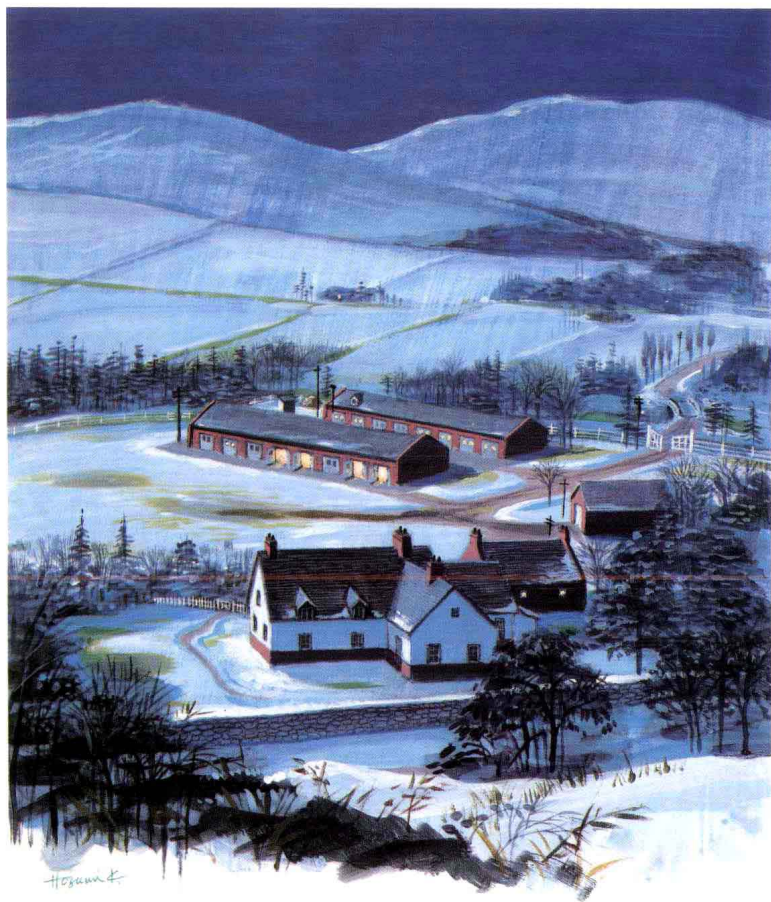


A・A・ミルン 『赤い館の秘密』 （大西尹明訳）

けだるくも暑い夏の昼さがり、赤い館は昼寝をしているさなかであつた。庭のふちとり花壇には蜜蜂のものの憂いうなり、榆の梢では鳩のやさしい鳴き声が聞こえ、遠い芝生のあたりからはあの芝刈器の、およそ田舎で聞こえるものの音のなかでは一番のどかな、ひとの働いているのを尻眼にかけて昼寝をしているという気持から、そののどけさもひとしお深まりを覚える、ブーッ・ブーッという音が響いていた。

Mystery Gallery-9

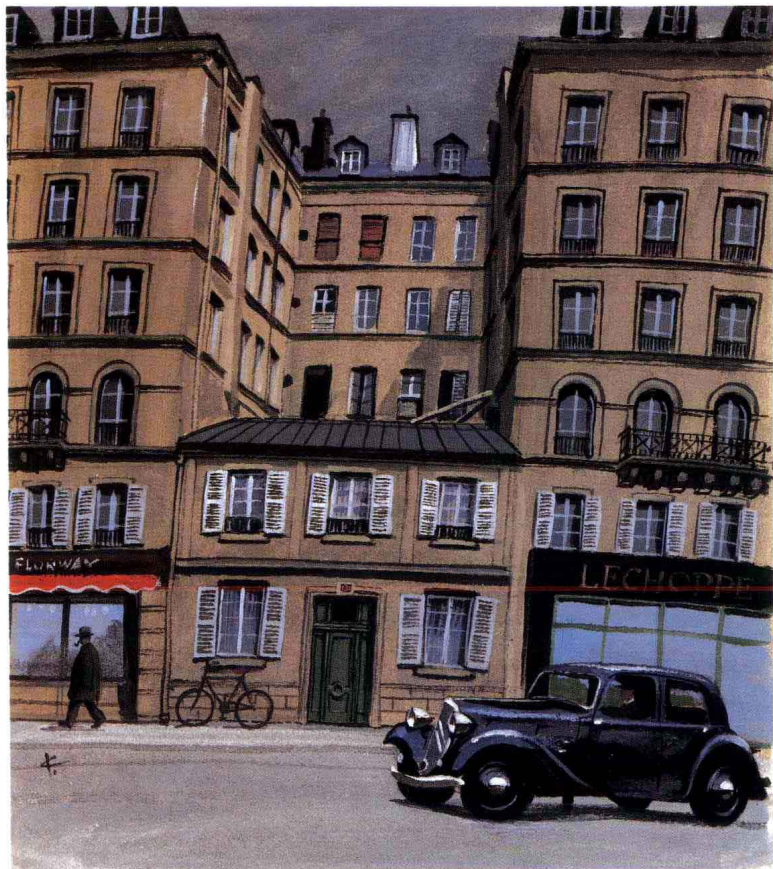
ハンバー厩舎



ディック・フランシス 『興奮』 (菊池光沢)

夕闇が迫り、ほとんどの馬房に明かりがついて広場に光をなげかけていた。私にいちばん近いところにあるハンバーの家がオフィスと広場の一部を遮蔽していたが、運搬車の車庫のドアがしまっているのが、斜めに見えた。その先の馬房の列は全部見渡すことができた。

メグレ警視のアパルトマン



ジョルジュ・シムノン『メグレと殺人者たち』（長島良三訳）

かわいそうなりシャル・ルノワール通り！ なぜこれほど評判がわるいのか？ もちろん、この通りはバステュー広場に通じているし、ごちゃごちゃした小さな街路に取りまかれている。しかも、この界隅は工場や、倉庫がいっぱいである。けれども、リシャル・ルノワール通りは広くて、真中には草花が生えている。

ディラード教授邸



S・S・ヴァン・ダイン 『僧正殺人事件』（宇野利泰訳）

ディラード邸は三九一番地にあり、右側のブロックのうちで、河沿いの場所だった。邸とリヴァサイド・ドライブのあいだは、十五階建ての大アパートが街角いっばいを占めているので、教授の邸はその巨大な建物の蔭に、なにかの庇護でも求めるような恰好で位置していた。

一柳家離家



横溝正史 『本陣殺人事件』

枝折リ戸を入ると、左側に低い四つ目垣が結えてあるが、その垣根越しに見える離家の庭にも綿をおいたような雪が降り積もっていて、どこにも踏み荒らされた跡はなかった。離家の中には電気がついていて、雨戸の上の欄間から、明るい灯の光が洩れている。

推理百貨店

別館目次



ミステリの家 22

- 1 “舞台の研究”ことはじめ——バスカヴィル家の犬
- 2 ハッター邸とグリーン屋敷——Yの悲劇
- 3 まるで舞台劇のような——マルタの鷹
- 4 世界一有名な被害者の家——アクロイド殺害事件
- 5 黄色い部屋の“秘密”——黄色い部屋の秘密
- 6 空中楼阁への招待——黒死館殺人事件
- 7 はるかモルグ街を離れて——アッシャー家の崩壊
- 8 明るく楽しい殺人現場へ——赤い館の秘密
- 9 逆境の象徴としての厩舎——興奮
- 10 裏町に生きる庶民の心意気——メグレ警視シリーズ
- 11 童謡殺人、ここに始まる——僧正殺人事件
- 12 和風密室、死体二個添え——本陣殺人事件

ハウジングセンター

カルチャーセンター

- 死人は俳句を詠まない 82
- 正しい新人賞のとり方 90
- TV映画のこと、及び映画に行かなくなったわけ
- 横文字の幽霊 112